

エッセー

むずかしいロシア語を楽しく？ 29年の試行錯誤

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 深澤 洋子

立教大学で兼任講師として教え始めたのは1994年のことで、着任当初は1、2年次生の必修科目の授業を年4コマ担当していましたが、2010年度のカリキュラム改編以降は2年次生以降向けの中級レベルの自由科目の授業を年2コマ教えてきました。自由科目の履修者は多くて5、6人、少ないと1人ということもありました。ロシア語を選択する学生は、他大学でもそうですが、どちらかといえば真面目で奥ゆかしい人が多く、人数が少ないだけにこちらも丁寧な指導をできたのではないかと思います。

天才的なポリグロットによれば最も難しい言語はスラブ系の言語だそうです、ロシア語はその代表格と言えます。特に名詞類の性数格によって異なる語尾変化形、不規則変化多数を擁する動詞の6つの現在変化形などをどうやって学生に覚えてもらうかで、教員は頭を悩ませます。1年次では数多くの文法事項の学習がどうしても中心になりますが、ある時2年目の学生がロシア語の質問に全く答えられず、キョトンとしていることに気が付きました。それを機にもっと教室でロシア語を使えるように、ロシア語で質問し、聞き取り、答える、ペアワークをするといった活動を増やしていきました。

2000年にロシア語教育研究会（現ロシア語教育学会）が発足し、そこで来日講演した著名なロシア語教育学者、A.A. アキーシナ先生とお話する機会がありました。先生はなるべく簡単な表現を、体も動かしながら覚えていくアクティブな授業を推奨されましたが、私は「日本人の教員としてはやはりシステムティックに文法を学びながら運用能力を伸ばしていきたいのです」とご相談しました。その時に先生に勧められた『ロシア語を読み始めましょう』（I.V. クルロヴァ）をもとに、その後の立教の授業を組み立てることになったのです。名詞の格や動詞の体など主要な文法項目をテーマとするテキストを読み、練習問題で既習文法の復習をし、さらに手作りのイラスト教材などを使ってペアワークをします。毎回の宿題のほか、語彙力をつけるため単語テストもしました。テキスト自体が平易かつユーモラスなので、十数年続けても飽きることはありませんでした。その間に、学生たちが覚えやすいように、複雑な格変化や動詞の用法を分かりやすく提示する工夫も編み出すことができました。

問題は週1回の授業では、文法を最後まで教える時間が十分ではないことでした。私の受講生の多くが次の年に上級レベルの科目を履修してくれましたが、ネイティブの先生が担当する会話・運用能力の習熟を中心とした授業であったため、私の授業で少し無理をして分詞などの文法項目を学ばせ、長文テキストの読解に挑戦させる必要がありました。ロシア語の論文や文学作品を読みたくなった時に読めるように、最低限の基礎と経験を身に付けさせたいという思いがありました。

また、他の必修言語と違い、ロシア語履修者には大学を通して短期留学できる制度がなかったため、ロシア政府やロシアの大学の留学生募集の情報を伝え、中にはサマースクールなどを通して語学力を磨き、ロシアの人々との交流を楽しんだ学生もいました。

2020年、新型コロナウイルス感染症拡大で急遽オンライン授業への対応を迫られたことは、他の多くの先生方と同様、私にとっても大きな出来事でした。それまでほとんど使っていなかったLMSやオンライン会議システムの使い方を一から短時間で覚えるため、パソコンにしがみつくと日々が続きました。この年の学生たちにはZoomでしか会うことができず、今でも心残りです。しかしとにかくITという利器によって、コロナ禍を乗り越え授業を続けられたことは画期的でした。私自身にとっても一種のデジタル革命で、ロシア語学習やロシア文化に関する様々なコンテンツをネット上で探し出してZoomで見せ、LMS（立教時間）で情報共有し、課題とその添削を迅速に立教時間でやりとりできるようになりました。少し敬遠していた新しい世界に一気に流し込まれたような感じです。

今、また対面授業ができるようになり、かけがえのない充実感があります。しかしオンラインでも授業ができるというメリットは大事かと思います。例えば、私の授業ではゲスト・スピーカーとして每学期1回、ネイティブの先生をお招きしましたが、遠隔地に住み子どもも小さいことからZoomで授業をしていただきました。その授業録画を次の時間に学生と見返し、聞き取れなかったことを確認することができます。ヒアリングの練習にもなるし、学生も「分からないまま終わってしまった…」ということがなく満足度が高いようです。

こうして振り返ってみると、何か斬新な教授法を試したわけでもなく、平凡な授業実践を続けてきたに過ぎません。立教を去るにあたって、共にがんばってロシア語を学んでくれた学生たちの顔を思い出すと幸せな気持ちになる、それが私にとって何よりのご褒美なのだろうと思います。

最後に、立教での仕事を支えてくださった全学共通カリキュラム運営センターの歴代の言語チームリーダーの先生方、事務室の皆さまに感謝申し上げます。ロシア語の専任教員がいない中、面談等により適宜情報を提供し、相談に応じていただきました。毎年の図書費により教材や授業研究資料を充実させることもできました。昨年度にロシア語を必修言語として選択できる学部が増え、池袋・新座両キャンパスでロシア語の授業が開講されました。ウクライナ侵攻後ロシアが孤立を深める国際情勢の中、ロシア語教育を重視、さらに拡充する方針を掲げているのは得難いことです。多くの立教生がロシアのダイナミズムに目を向け、ロシア語を選択してくれることを祈っています。

ふかさわ ようこ